

## デフテリヤのお話

醫學士 宇都野 研

デフテリヤといふ病氣は、急性の傳染病で、特に小兒を多く侵す病氣であります。稀には大人もかかる事があります。

デフテリヤの病原はレフレルといふ人の發見した細長い細菌であります。其が好んで人間の咽頭、喉頭、鼻腔等に巣をつくります。この他に、眼瞼、脣にも、他の粘膜にも、また耳の外聴道にも、氣管枝にも時としては宿ることもありますが、其は極めて稀なのであります。

それでデフテリヤ菌といふものは、附著した所に白い幕の様なものをつくつて、其處へ住んでゐるのであります。そして血行中には這入つて行かぬのであります。巢をつくつたところで毒をこしらへ、それを血液の中に送ります。さうしてこのデフテリア菌の毒素によりて、中毒を起すのであります。

デフテリヤに罹る子供の年齢はどうであるかと云ひますと、年齢の少い程かゝり易く、生後満一歳以

後から幼稚園児童にかけて大層多いのであります。別に男女に依つて罹る程度に差はありませんけれど、一度デフテリヤにかゝればほんの三週間位の免疫を得るだけで、また繰返し病氣にかかるのであります。百日咳やはしかのやうに一度かゝれば罹らないといふ事がないのであります。

デフテリヤが最も多くつく場所は今述べました三つの場所のうち、咽頭の奥に見えるのとだけの兩脇にある扁桃腺のところであります。白い疑膜をつくりますから、デフテリヤではないかしらと思ひましたら、咽頭を見るのが一番よろしくござります。デフテリヤの初めの容體は風邪をひいたのと餘り變りなく、割合に高くなり熱が（三十八度前後）あり、頭痛もし、時としては咽喉の痛みを訴へることもあります。時としては熱のない事もあります。その折には感冒とあやまられることが屢々あります。顎下腺をおしてみると、多少はれてゐて、痛みを覺えま

す。これは大事な容體の一つであります。西洋のお母さんはよくすることがありますが、手の指を綺麗に洗つて、或はお匙で、子供の咽喉を押しかけて見ますと、扁桃に白いものがついてゐます。この時はデフテリアの確かな證據であります。日本の家庭でも母親たちはのどをあけて見た方が結構です。

こゝに注意すべきは、ロホー性扁桃腺とデフテリ亞が非常によく似てゐることであります。ロホー性扁桃腺は却て熱が高いことがあります。それ故に、

熱が少いからとて軽い病氣と云つてはならぬのであります。

デフテリアになりますと、喉頭即ち聲帶のあるところから、犬の吠えるやうな聲が響き出て、又、咳も出て來ます。しかし、咳の出ることは、デフテリ亞のものでなくとも、假性クループといふのにも、同じ徵候があらはれてまるります。假性クループは、夜中に急に變な咳が出て驚いてゐると、次の日にはすぐ癒つてしまひます。こんな癖のある子供が澤山あつて母親がずいぶんと心配させられます。ほんとうのクループですと、咳がやまないばかりか、吸氣困難を來たします。

生れて間もない赤んぼにはデフテリアが鼻腔につくことがありまして、風邪のやうに、水鼻が出て、うすい血液の色を帶びた鼻汁が流れます。その鼻汁には毒が混じてありますから、脣などに腫物が出来ます。これは比較的熱がないので、閑却されてゐます處。却て豫後がはかゞしくまゐりません。少し年をとつた子供ですと、赤んぼ程に鼻汁が出ませんし、他に變化のない爲に氣づかないで居りますと、鼻の中に白い膜が出來て居ります。

毒素はデフテリアがつくつて血行の中に送りこみますと、人間の血液のは一種の抗毒素が出来るものでありますから、かまはすに置きましても治ることは治るのですが、然しながら人工的にデフテリアの毒素と中和するものを注射することにしてあります。これはデフテリアの血清を馬に注射して、始めは量を少くして順々に量を多くして之に馴らして、馬の體内に出來た抗毒素を馬の血清を注射して人間の體の中に入れるのであります。血清注射は早ければ早い程よいのであります。デフテリアを發見した第一日目に注射すれば死亡率は三%、四日目位では九%，一週間立てば四〇%にものぼりますから、

注射は早ければ早い方がよろしいのであります。

こゝに一寸申し上げて置きたいのは、二度目に注射をします時に、極めて稀な例ではあります、人間が死ぬことがあるのであります。動物では注射で死ぬことはよくありますが、人間もまれにはそうした事が起るのであります。一回目の注射したなど、十日以上半年以内にもう一度デフテリアにかかりますと、注射をしなければならぬ時でも、よく注意してすれば、決して死するやうな事もありません。注射すれば大抵十時間も立てば熱が下り、十四時間も立てば無熱になります。

然しながら、二三週間立つて、目が見えなくなり、聲が鼻聲になつたり、食べたものが鼻から出たりします。それはデフテリアの毒のため、眼の筋肉が麻痹して、目の位置が變になり、遠近が見えなくなるのであります。又食べものを鼻から出すのは、胃のみこむ力がなくなるから、管をさして食べ物を胃に送つたりします。もつとひどいのになると、足もたてなくなるといふのもあります。

何故に抗毒素なる血清注射を行ふてもこんな状態が起るかといふと、勿論注射した方がしない時より

は幾分かよろしいのであります。が、デフテリア菌も皆同一のものでなく、血清によつては中和されないのがあるからであります。それでも、注射は大變きゝめがあるものでありますから、施した方がよろしくあります。

デフテリアが治りかけて一ヶ月以後になつて、元氣がよくなりかけてから、突然に心臓麻痺になつて死ぬ人があります。便所へ行つていきむとか、かけっこすると、繩飛びをしたりして、急に起ることがありますから、デフテリアの後は極めて安静にすることが必要であります。

デフテリア菌は百日咳等と違ひまして人體の外に出ましてもいつまでも長く生きてゐますのであります。デフテリーの子供から出た痰や唾液を著物につけたまゝ外出して家に歸つて來ても、未だ生きてゐて傳染します。それ故、ハンケチ、痰壺、などは三十倍のリゾール又は石炭酸で一日つけて置いてから洗濯します。著物等もさうして消毒します。もしデフテリアの子供を見舞にでもゆく時は、著物の上に上覆をかけてゆくやうにします。（文責在記者）